

『ダロウェイ夫人』における想像とコミュニケーション

鵜飼信光

本発表では、想像とコミュニケーションという、二つの観点から『ダロウェイ夫人』を出版から100年後の現在に読む意義を考察した。それらの観点を選んだのには、ポピュリズムが勢力を増しつつあることへの憂慮がある。ただし、そうした勢力を、自分とは異質で無縁な他者として非難するのではなく、彼らの中の悪しき要素を自分自身のものとして捉えながら、よりよい未来を模索することを、『ダロウェイ夫人』という作品を手がかりに試みた。

I

考察の前半では、まず、想像に関わる主に三つの箇所を取り上げて、それぞれに考察を加えた。

最初には、作品始め近くで、主人公クラリッサ・ダロウェイが、人々が今この瞬間、lifeへの強い愛から、一瞬一瞬、自分のまわりで世界を作っては壊している、ということを感じる箇所を取り上げた。一瞬、一瞬世界を作り替えるとは、ただならぬことのようにあり、クラリッサはそれをlifeへの強い愛と結びつけてもいるのだが、作品は私たちが普通に生きて生活していることが一瞬、一瞬世界を作り替えているようなものとして捉えているようであることを見た。その関連で、外界のある刺激が、集団の心理に影響を与えることの表現、具体的には、クラリッサが花屋で花を買っている時、王室か政府の重要人物が乗っているらしい自動車がパンクし、ブラインドを下ろし、修理が終わった後、ゆっくり走り去る、というエピソードを取り上げた。そこでは、その自動車が、人々の国家や帝国への忠誠心を微妙に刺激し、例えば、酒場で愛国主義的な喧嘩が起きたことが描かれる。人々は重要人物が乗っているらしい自動車について想像をめぐらし、言わば、眼前の世界を作り替えるが、その作り替えは自分自身にも作用し、人々の自己は、国家や帝国への忠誠心をより強く持つような自己へと、作り替えられる。国家や帝国への忠誠心は、ポピュリズムとは同じではないが、大衆が何気ない外界の刺激に反応して、微妙だけれども、formidableな変容をこうむることを描くこのエピソードは、政治家の言動に大衆が揺り動かされるポピュリズムを予兆するものとして注目される。

上述のように、眼前の世界の作り替えは自己の作り替えを伴うが、重要人物の自動車のエピソードでの作り替えは、人々が意図しないまま行われているものである。それとは違って、外界も自己も、意図的に作り替えられるエピソードとして、ピーター・ウォルシュが、街で見かけた美しい女性を尾行し、彼女が住居に入って姿を消すまで、女性の性質を恣意的に、自分好みに、様々に想像して、冒険的な気分を楽しむ、というエピソードを次に考察した。ピーターには女性を当惑させる気はないが、女性の方は尾行に気づいて恐怖を覚えるかもしれない、このエピソードはピーターの潜在的な暴力性を示している。それもこのエピソードの重要な点だが、女性が姿を消した後、ピーターは、「自分自身を作り上げ、彼女を作り上げて。すばらしい楽しみと、それ以上の何かを生みだして」(59)と思うように、彼が自己の作り替えも行っていたことがこのエピソードでは描かれている。

次に、語り手が、想像力を奔放に発揮している箇所として、ピーターがリージェント公園のベンチで眠り込む一節を考察した。その一節でピーターはベンチで眠りに落ちて、いびきをかき始めるが、その横に灰色の服を着た子守の女性が編み物をしている。語り手は「彼女は眠る者の権利の擁護者のように見えた。それは、森で薄明の時に、空と枝枝で作られ浮かび上がる、幽霊のような存在のようだった。」(62)と述べ、さらに、森を行く、孤独な旅人は、行く手の果てに、巨大な像を見た、と述べる。この一節で注目されるのは、2ページあまりのこの一節が、ベンチで眠るピーターと子守の女性の様子から触発された語り手の想像である、ということである。しかも、語り手が紡ぎ出す想像は、孤独な旅人が、遠くに見える空と枝枝の形に、巨大な女神を想像する、という、想像についての想像になっている。そして語り手は、孤独な旅人が、想像上の女神に、自分が望むような性質を与えて、許しや理解など、望みのものをその女神から得ることを述べる。「そのようなものが孤独な旅人に、大きな豊穡の角を提供するヴィジョンである。(中略)そのようなものが、現実のものの前に浮かび上がり、横について歩き、顔をのぞかせるヴィジョンである。」(63)と語り手は、私たちが、現実と並行して、そうした都合のよいヴィジョンを想像力で生みだして、恵みを受け続けていることを描く。この一節はまた、語り手が、ピーターと子守の女性という眼前のものを作り替えて、そうしたそれ自体ヴィジョンと呼ぶべきものを想像で作り出して読者に提示するという、語り手の読者に対するコミュニケーションの試みとしても捉えることができる。

II

本発表の後半では、コミュニケーションの問題を考察した。

手始めには、クラリッサの夫リチャードが、夫婦が最初にウルフの作品で登場する『船出』において、主人公レイチェルにキスするという出来事に、彼がいつになく感じていたコミュニケーションへの欲求の満足があったことを見た。そして、『ダロウェイ夫人』の方でも、リチャードが感情を他者に伝える、というコミュニケーションを最初できないでいたのが、何とか出来るようになっていくこと、また、セプティマスの自殺の様子をクラリッサが正しく想像できたという、神秘的なコミュニケーションの実現にも、コミュニケーションの実現への作品の希望が描かれていることを見た。

『船出』でのリチャードは、女性について保守的な考えを持っていて、自分は女性とは政治の話をしたくない、という発言もするが、レイチェルに真剣に質問されて、自分が抱いている理想が何であるかを一生懸命説明したりする。また、自分の子供時代の話も、レイチェルが純粋な、強い関心を持って聞いてくれることを感じたりする。そうしたある日、嵐でひどい船酔いになっていたのがようやくさめて、通路でたまたまぶつかって、レイチェルの部屋へ入って、二人それぞれ椅子に座っていた時、船が級に揺られて身体が接触し、リチャードがレイチェルを抱きしめて激しくキスする、という出来事が起きる。リチャードは、レイチェルとの会話で、コミュニケーションの喜びに目覚め、いつにないコミュニケーションの喜びによって、レイチェルに異様に惹かれて、自分自身でもよくわからないまま、ふとしたきっかけで彼女を抱擁し、キスをしてしまったと考えられる。だからと言って、リチャードのしたことがひどくないわけではないが、ただ、ウルフがどういふつもりでこのエピソードを書いたのかを考える時、コミュニケーションへの欲求が最大の鍵であることが見えてくる。『ダロウェイ夫人』でもリチャードは、自身の気持ちを他者に伝えることが苦手であることが描かれるが、パーティーの場面で、娘が美しい、と思ったことを、そのまま娘に伝えることができ、リチャードに対し批判的だったピーターとサリーも、リチャードがよくなったと、言い合う。そうした、ほんのわずかなことではあるが、登場人物たちがより豊かなコミュニケーションへ向かうことへの希望が作品の末尾で描かれている。

また、作品の終わり近くで、クラリッサは、セプティマスという未知の青年が自殺したことを聞いた時、彼が体験した死の瞬間を、正確に追体験する。それは、二人の間に超自然的なコミュニケーションが成立したことを描いている。セプティマスの死を聞いた時のクラリッサの思いの一節では、死がコミュニケーションの企てである、と言われていて、作品はその企てが神秘的な形で実現していることを描いている。

III

最後に、これまで作品について考察してきたことをもとに、ポピュリズムの問題について考察した。

民主主義に対して敵対的な政治家を支持し、何らかの陰謀論を唱える人々の中には、事実ではないことを嘘だとはっきり認識しながら、事実として宣伝する人たちが一定するいると考えられる。そういう人々について、想像力によって現実をねじ曲げている、というように、想像力という言葉を使うのは不適切ではあるが、しかし、自分の願望に合うように歪曲した世界の捉え方に固執するそれらの人々がしていることは、ピーター・ウォルシュの居眠りのエピソードで語り手が描いていたように、現実と並行して、自分たちに喜びを与えるヴィジョンを常に持ち続けるという私たちの姿と、本質的な違いはないと言うべきであるだろう。また、クラリッサが思い、作者がそれを描いているように、私たち誰もが、私自身の周りで世界を作っては壊しており、私たち自身も世界をねじ曲げて捉えてしまう可能性にさらされている。

また、民主主義に敵対的な政治家の熱烈な支持者たちが、憎悪をたきつけることについては、『船出』でリチャードが「私たちは、何という冰山なのでしょう、ミス・ヴィンレイス！何と少ししか、私たちは意思疎通ができないでしょう！」(66)と言っているように、憎悪のたきつけを非難する私たち自身も孤立した冰山のように、わずかなコミュニケーションしか、お互いに取れていないのかもしれない。このように、民主主義に敵対的で、分断と憎悪をあおる人々も、私たちと似たところがあると言うだけでは、未来を少しもよくできないように思われるかもしれない。しかし、憎悪に対して憎悪で反応せず、相手も自分と同質であると、受け入れることを心がけることは、未来をわずかばかりでもよくするのだと希望を持ちたい。それは根気のいることだが、辛抱強く、そうした態度をとり続けるようにと、ウルフの作品は私たちに教え続けているのである。

文献表

Woolf, Virginia. *Mrs Dalloway*. Penguin Classics, Stella McNichol ed. 1992.

----- *The Voyage Out*. Penguin. Jane Wheare ed. 1992.